ルース・リチャードソン著
矢野真千子訳
『グレイ解剖学の誕生――二人のヘンリーの1858年――』

『グレイ解剖学』は1858年に初版が出され，2008年刊の第40版まで連綿と改訂を重ねてきた，解剖学書の代表格である．医学の世界で最も知名度の高い医学書であるといっても過言ではない．2005年の第39版では，『グレイ解剖学』の伝統を断絶するといってもいいほどに編集方針を大きく変更したが，グレイ解剖学の後裔であることを再確認するために，歴史家のリチャードソンに依頼して『グレイ解剖学』の歴史についての序論を掲載している．本書『グレイ解剖学の誕生』の原著（Richardson, R: The making of Mr. Gray's anatomy — bodies, books, fortune, fame. Oxford: Oxford University Press, 2008）は，この歴史的序文の執筆を契機として，生み出されたドキュメンタリーである．

『グレイ解剖学』を当時の他の解剖学書と比較してみると，手頃な大きさとコンパクトな記述，そして何よりも分かりやすく迫力ある解剖図がきわめて秀逸である．本文を執筆したグレイ Gray, Henry（1827–1861）と解剖図を描いたカーター Carter, Henry Vandyke（1831–1897）の緊密な協力作業の賜物である．グレイは，ロンドンの聖ジョージ病院の解剖学講師で，将来を嘱望された俊英であったが，解剖学書出版のわずか3年後に天然痘のために急逝してしまう．しかし不思議なことに，グレイの追悼文は書かれることがなく，グレイの生前の人柄や思い出を語る人もいなかった．また日記や回想録も残されていないために，リチャードソンは，グレイの経歴や行動，周囲の人たちとの人間関係からグレイの人物像を明るみに出していく．紳士的で知的な容貌をもち，病院一の外科医になるという大望をもち，何事にも熱心に集中して取り組み，才気と野心を光らせている．4歳年下のカーターは，内省的で大人しく，画家の父親から受け継いだ画才と鋭い観察眼をもち，自分の努力で途を切り開くことを願っている．強引で自己中心的なグレイと従順で協調的なカーターは聖ジョージ病院で出会い，協力しながらも激しい葛藤を抱えていた．彼らが解剖した遺体を含め，当時の解剖体の多くが，病死した貧困者のもので親族に連絡をとらずに解剖されたものであろうという19世紀のイギリスの陰鬱な解剖体供給事情も語られているが，これは著者の既刊書（Richardson, R: Death, dissection and the destitute. Chicago: University of Chicago Press, 2000）のテーマでもあった．

リチャードソンは，『グレイ解剖学』初版が出版されるまでに劇的なドラマがあったことも明らかにした．苦心の末に作成された364点の解剖図の彫版が，予定された紙面よりも大きく作られていたことが判明した．出版社には資金的にも時間的にも余裕がなく，できあがった彫版を生かして，図題を活字に変えたり，余白にはみ出したりの調整を行って，無事に紙面に収めることに成功した．この事情を知って初版をみると，頁からはみ出んばかりの解剖図の迫力と紙面にみなぎる緊張感の理由がよく分かる．

さらにリチャードソンの調査過程で驚くべきものが発見されている．エディンバラ王立外科医協会の文書館に保存されていた初版の早刷りに，扉頁が含まれている．ここに印刷されているカーターの名前と肩書はグレイと対等なものとして扱われていたのだが，グレイ自身の筆跡でカーターの名前を小さくすることと，肩書の一部（ポンペイ，グラント医科大学解剖学教授）を削除するようにと指示されている．グレイが序文でカーターを「友人」と呼びながら，独善的で友情に値しない行為をしていたことを，この残された証拠が暴き出している．

グレイが早世した後，編集に協力していたホームズ Holmes, Timothy（1825–1907）が引き継いで

1880年までその後の版の編集を行った．1883年から1905年までは，その弟子のピックPick, Pickering（1841–1919）が編集を引き継いだ．それにより『グレイ解剖学』は生き延びることができた．しかしホームズもピックも，グレイという人物については奇妙に沈黙を守っている．死者への悪口を言わずに，『グレイ解剖学』という権威の創始者を守りたかったのではないかと，推測されている．

グレイは，医学における歴史上の人物であるが，これまで取り上げられることがなかった．本書でリチャードソンが描き出したのは，ヴィクトリア時代の中で演じられた二人の若い医学者のドラマであると同時に，見失われていた事実を探り出していく現在のドラマでもある．埋もれていた資料を探し出して，グレイとカーターという2人の若者の実像と，彼らが希代の解剖学書を生み出していく劇的な過程が明らかにされ，さらにその周囲の人間模様とヴィクトリア時代の社会の一端が描かれている．医学史の著作としても，歴史のドキュメンタリーとしても楽しませてくれる上質の一冊である．訳者は，イギリスの解剖学者ジョン・ハンターの伝記も訳しており（ウェンディ・ムーア著，矢野真千子訳『解剖医ジョン・ハンターの数奇な生涯』河出書房新社，2007），今回の訳書においても日本語訳は流麗で原著の味わいを十全に伝えている．

（坂井　建雄）

［東洋書林，〒162-0801 東京都新宿区山吹町4-7 新宿山吹町ビル，TEL. 03（5206）7840，2010年9月，A5判，398頁，3,200円＋税］